

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32633

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K17451

研究課題名（和文）緩和ケアを受ける患者が大切な人へメッセージを送ることを促す看護ケアの明確化

研究課題名（英文）Defining the Care of How to Encourage Patients in Palliative Care to Send Messages to Their Loved One.

研究代表者

樋勝 彩子（HIKATSU, Ayako）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：30759147

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：緩和ケアを受ける患者が大切な人と気持ちを伝え合うこと支えるための看護ケアのプロセスを明らかにするために、看護師10名に半構造化面接調査を実施した。結果、看護師は患者の病態変化を観察して予後予測を行い、患者が家族など大切な人に気持ちを伝えられるよう、タイミングを計って関わっていた。また、本人や家族のメッセージを代弁したり、相手への手紙に記すための手助けをして、両者が気持ちを伝えあうことを支えていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

緩和ケアを受ける患者と家族が気持ちを伝えあうという希少な事例場面を集積し、そこに関わる看護師の具体的なケアの内容を可視化するという本研究の特色から、2つの結果が得られた。看取りの具体的なケア内容を、他の看護師にも伝わる形に可視化し広く発信することによって、多くの看護師のケアの質を向上させ、それにより死にゆく患者が最期までQOLを保ち生活することに資すると考える。2つ目は、それらのケアが看護師にとっても自己を肯定的に評価し、ケアの意味を自ら見出すことの助けとなることを見出され、看護師の精神的疲弊やバーンアウトを防ぎ、ケアの担い手として継続して実践することにも貢献すると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify nursing care to support patients receiving palliative care to convey messages to their loved ones. The interview guide based on the literature review, semi-structured interviews were conducted with 10 nurses engaged in palliative care. As a result, nurses assessed conditions of the patients, and was involved in timing their involvement on when to have the patients tell their feelings towards their loved ones. They also supported both parties in communicating their feelings by speaking for them and their families and helping them to write their messages in letters to the other party.

研究分野：基礎看護学

キーワード：緩和ケア コミュニケーション スピリチュアルケア がん患者 看取り 家族

1. 研究開始当初の背景

(1) わが国の看取りの現状

近年の日本の人口動態統計をみると、年間の死亡者数が2000年頃から増加の一途をたどり、2005年から出生数に対して死亡数が上回るようになり、現在では年間129万人の死亡者がある。死亡率は他の先進国に比べても高く、今後も数十年は多死社会が続くことが予測されている。また、あらゆる死亡原因のなかで最多数を占めるのががんであり、昨年は1年間に39万人が死亡している。がんの治療は遺伝子レベルでのがんの本態解明とともに、各種がんの早期発見、標準的な治療法の確立など進歩を遂げているが、いわゆる「がん」で国民の3人に1人が命を落としている現状である。2007年に策定された「がん対策推進基本計画」では、早期からの緩和ケアの提供が重点課題とされ、早期の緩和ケア導入、がんと診断された時から患者とその家族が、精神心理的苦痛に対する心のケアを含めた全人的な緩和ケアを受けられるよう、緩和ケアの提供体制をより充実させることを基本方針としている。このように、がんで亡くなる人の増加、早期からの緩和ケア導入という施策を受け、全国の緩和ケア病棟は20年で40倍に増加しており、今後も緩和ケア病棟での看取りが増えることが予測される。

(2) 死を迎える人が「大切な人にメッセージを送ること」の意味

「死」が避けられない状況のなかで、人が何を望むのかを明らかにした研究がある。Miyashitaらによると、日本人の多くは「苦痛がないこと」「望んだ場所で過ごすこと」「医療者や家族との良好な関係を築くこと」を望んでおり、人によっては、「家族や友人に自分の思いを伝える」というニーズがあることが述べられていた¹⁾。終末期がん患者とその家族が思いを伝え合うことによって、患者のQOLが向上するという調査結果²⁾もあり、そのプロセスの重要性は明白である。しかし一方で、患者の病状が進行し予後に希望が持てない状況が色濃くなるにつれて、それまでの患者と家族の関係性は変化し、コミュニケーションがなかなかとれずに乖離していってしまうことも指摘されている³⁾。

緩和ケア病棟の看護師は、死期がせまる患者の人生に寄り添い、その人が最期まで望みをもって生きることを支える。そのやりがいとはとても大きい反面、患者の望みをかなえられず、患者やその周りの人たちが自分の気持ちを伝えられないまま死を迎えることになったときには、自分の関わり方が本当に良かったのかと自問し、大きなストレスを抱えることもある⁴⁾。患者本人のみならず、医療者にとっても患者と家族が気持ちを伝え合うことは重要であり、それができた場合には、長期にわたって肯定的感情をもち続けていることも明らかになっている⁵⁾。

このような背景から、がんが死が迫る人が自分の大切な人へメッセージを送ることを推進するケアは、今後の多死社会において欠かすことのできない看護ケアであると考えられる。しかしながらそのケアのプロセスは実証的研究がされておらず、個々の看護師が経験をもとにして実施しているものと予測する。本研究では、そうした看護ケアの事例を集積し、他者に説明可能な形で具体的に可視化し、看護技術として確立していくことを目標とする。

2. 研究の目的

緩和ケアを受けるなかで患者と家族が気持ちを伝え合うことを支える看護ケアのプロセスを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

半構成的面接調査に基づく質的記述研究

(2) 対象

以下の2つの基準を全て満たす者を対象とする。

緩和ケア病棟あるいは緩和ケアチームに1年以上従事した経験がある看護師
看護師経験年数5年以上

(3) 対象者のリクルート方法

下記の2通りの方法にて実施した

病院看護部への協力依頼

首都圏のがん緩和ケア病棟管理者やがん緩和ケア認定看護師に対し、文書にて研究協力者の募集を依頼し、研究に協力する意思のある者から研究者に直接連絡をもらい、研究に関する説明を文書にて行った。

ネットワークサンプリング

研究者の知人に研究対象者の紹介を依頼し、研究に協力する意思のある者から研究者に直接連絡をもらい、研究に関する説明を文書にて行った。

インタビュー当日は文書を用いて研究内容について再度説明し、同意書に署名をしてもらった。その際、研究協力断り書と研究機関の住所、研究機関代表者の宛名入りの封筒を研

究対象者に手渡した。研究同意書は、研究対象者及び研究者が署名あるいは記名捺印したものを2部作成し、一部を説明文書とともに研究対象者に渡し、もう一部は研究者が保管した。研究中止の申し出は研究者の所属する大学宛てとし、口頭および郵送でも意思を表明できるようにした。

(4) データ収集

データ収集期間

2021年10月～2022年2月

インタビュー方法

研究参加者には、インタビュー前に今までの看取り時期の実践経験の中で、患者が大切な家族や友人にメッセージを伝えられるよう看護ケアを実施した経験を思い返してもらい、そのうち、印象に残る事例について半構成的記述シートに記述してもらった。

インタビューは、インタビューガイドと研究参加者が事前に記述したシートの内容をもとに、看取り時期の患者と家族が気持ちを伝えあうことを支える看護ケアの内容とそのときの患者や周囲の人々の反応について自由な語りを得た。

インタビューはプライバシーの確保できる個室で行い、インタビュー内容は研究参加者の許可を得てICレコーダーにて録音した。インタビューの時間は60分程度とし、研究参加者の語りを遮らないように進めるとともに、時間的拘束による疲労を最小にするよう配慮した。さらに、インタビュー回数は1人1回とし、インタビュー内容の確認や追加質問の必要がある場合、2回目のインタビューの可能性のあることを研究実施前に研究参加者に説明し、同意を得た。

(5) データ分析

インタビューによって得られた質的データから、分析テーマに沿った具体的ケアの内容を抽出し、各事例に特有の状況と、共通性のあること、相違性のある内容について継続比較分析を行った。

分析の過程においては、がん緩和ケアのエキスパートであるがん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師、緩和ケア医や聖職者に意見を求め、分析の妥当性を検討した。

(6) 倫理的配慮

対象者の選定では、インフォームド・コンセントを十分に行い、断る権利を保証しつつ自由意思を尊重した。研究参加の意思は対象者本人から直接研究者に伝えてもらい、研究の周知をした者には、対象者の研究参加や中断の有無を伝えないようにし、本人への不利益が生じないように配慮した。また、対象者が話した内容は本研究以外には使用しないこと、研究結果は匿名とし、個人が特定できる団体名や職名、年齢はすべて暗号化することを事前に説明した。面接で話す内容は対象者の自由意思に基づき、話したくない内容については答える必要のないことを事前に説明した。

なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 研究対象者の属性

対象となった看護師は10名で、男性1名女性9名、平均臨床経験年数は17.5年、緩和ケア領域での平均経験年数は10.2年であった。面接回数は全員1回で、平均面接時間は79.1分であった。

(2) 緩和ケアを受ける患者と家族が気持ちを伝え合うことを支える看護ケアのプロセス

看護師は緩和ケアを受ける患者との出会いの段階から、患者の気がかりや大切にしている価値観を模索しながら関わりはじめる。患者からの言語的な表出により家族関係に課題が見出されることもあれば、看護師が患者の声にならないサインをキャッチし、ケアの合間や訪室のたびに相手の気がかりになっていることについて拾い上げていくことで明らかになるニーズもある。看護師はむやみに患者の心情に踏み込むことをせず、いつでも聞く態勢が整っていることが伝わるように態度で示しながら、日常生活の支援を十分に行い何気なく接触する機会を増やすことによって患者との信頼関係を築き、患者が他人へ伝えにくいような信条も話せるよう準備をする。そして、病気になる前の患者と家族の関係性についても質問をして、現状との比較をしながら、今の患者家族関係をアセスメントする。他方、患者の病状悪化が早く看取りまでの時間が残されていない場合には、刻々と変化する患者の病状をみながら、タイミングを見計らって積極的に患者家族の受け止め状況を確認し、患者家族が希望する場合には、自分の言葉で両者が気持ちを伝えられるように働きかけることもある。

患者を想うあまりコミュニケーションがぎこちない家族に対しては、これまで通り自然体で過ごすことができるよう、看護師は患者の身体的精神的状況をわかりやすく説明し、家族の恐れや不安をやわらげ、両者のコミュニケーションを橋渡しする。患者に近づくことを恐れている家族には、その距離を縮めるための足掛かりとなるような身体的ケアへの参加を促したり、面会時の役割を与えたりして、患者と家族が同じ時間を共有できるように行動する。そう

することで、家族は安心して患者のそばにいられるようになっていく。このような穏やかな時間は、患者の身体的苦痛が十分抑えられるようにさりげなく行う薬剤投与やケアの時間調整と、患者と家族がよい時間が過ごせるようにと願う周囲のチームメンバーの協力によって成立している。

患者と家族が自然体で共に過ごせるようになったことを確認すると、看護師は両者のやりとりが続くことを見守り、病室をあとにする。看護師は、患者と家族が自分の気持ちを伝え合う様子を直接確認できることは少ないが、遺族からの感謝の言葉や手紙をもらい、自分の実践の意味を再確認する。そして、出会った患者や家族からの思いを日々の関わりにかそうと、目の前の患者が大事にすることを再び模索し続けることに立ち返っていた。

<引用文献>

- 1) Miyashita M, Sanjo M, Morita T, et al. (2007). Good death in cancer care: a nationwide quantitative study. *Ann Oncol*, 18(6), 1090-1097.
- 2) 小林さゆり (2016). 終末期がん患者・家族が思いを伝え合うことによる QOL への影響 . 死の臨床 . 39 (1), 180-184 .
- 3) 加藤恵子 (2013). がんの進行に伴い生じてくる家族 患者間のコミュニケーションの乖離プロセスに関する研究 家族の視点から . 家族看護学研究 . 18 (2), 95-107 .
- 4) 吉田智美 (1996). がんの終末期で症状緩和をうける患者の家族のストレス・コーピング 一般病棟と緩和ケア病棟の比較 . 日本看護科学会誌 . 16(3) , 10-20.
- 5) 吉田みつ子 (1999). ホスピスにおける看護婦の「死」観に関する研究 “ 良い看とり ” をめぐって 日本看護科学会誌 . 19(1) , 49-59 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------